大坪涼子（おおつぼりょうこ）
（日本共産党）

カキのへい死に支援は
県や漁協と協議し検討する

こちらから視聴できます

問 全国的に養殖カキのへい死が問題となっている。市内の実態はどうか。

答 県の調査で、出荷時の養殖カキ生残率は30％から70％となっている。

問 本市の養殖漁業の被害は災害並みの事態であり、水産業にとって死活問題となっている。国の交付金に留まらず、燃油高騰や貝毒検査費用の負担など、本市独自の直接支援はどうか。

答 本市の漁業が自然環境や社会情勢の変化にさらされていることは重く受け止めている。追加的な支援策は県や漁協と協議し検討を進めていく。

保育料無償化は

問 現在、本市の保育料は第1子の3歳未満児だけが保護者負担となっている。早急に完全無償化できないか。

答 財政面だけではなく、保育士の確保が必要と考える。

問 小中高入学時の子育て応援クーポン券の増額はどうか。

答 国の物価高騰対策を注視し、引き続き検討する。

問 育児家族のレスパイトケア支援の今後の改善はどうか。

答 在宅の医療的ケア児を対象に訪問看護師派遣のレスパイト事業の来年度実施に向け検討を進めている。

最盛期を迎えたカキの出荷作業
（米崎町）

大坂俊（おおさかたかし）

残土置き場の利活用は
産業振興や企業立地で検討

こちらから視聴できます

問 復興事業による移転元地の事業残土は、放置すれば負の遺産となる。対応が必要では。

答 残土活用と移転元地の利活用は、産業振興や企業立地の担当課と連携しながら可能性を検討したい。

問 市が数億円の交付金を活用して宮城県境に取得した公有地は、放置すれば山林と化す。市は、利活用について責任があると思うがどうか。

答 本市が太平洋セメント株式会社から取得した福伏鉱山跡地については、復興事業に係る土砂の仮置き場として活用してきた。今後は公共的な活用の可能性等を踏まえながら、公有地の適正な管理と有効活用に努めたい。

復興の先には何が

問 市長が選挙時に掲げた「復興の先」はどのようなものか。

答 私の思いとしては、「復興の先」は「未来、あるいは将来への希望」。「陸前高田市の将来を担う世代、こども、若者のための支援をもっと積極的に行うこと」。あるいは「将来にわたって陸前高田市が発展出来るように、新たな種をまくこと」と考えている。

移転元地の残土（長部川右岸）

大和田加代子（おおわだかよこ）

ストーマ装具災害預託は
来年度からの開始を目指す

こちらから視聴できます

問 人工肛門、人工膀胱を造設したオストメイトの排泄物を溜めるストーマ装具を災害時等に備えて行政が預かる「災害預託」はどうか。

答 市役所で預かる形となるが、来年度からの開始を目指す。

問 重度障がいのある人などを対象とする日常生活用具給付等事業の給付基準額の見直しは。

答 この事業が開始された平成18年以降見直しを行っていなかった。対象となる日常生活用具の価格も上昇傾向なので見直す必要がある。

問 オストメイト社会適応訓練事業と各障がい者団体の活動等の周知は。

答 当該事業についてはホームページ、SNSなどで情報発信し、日常生活用具給付決定の通知文書に同封する。障がい者団体については、会員募集やイベント等の周知依頼があった際、対象者に個別に情報発信している。

オストメイトトイレが整備されたユニバーサルトイレ
（市役所）

鎮魂の庭は

問 鎮魂の庭プロジェクトの進ちょくは。

答 総工費は5～7億円と想定され、1億円が集まり次第着工するとされている。整備を担う日本庭園芸術協会ではホームページ等で寄付を募っている。本市では企業版ふるさと納税で募集しているが、現在の寄付額は600万円となっている。

佐々木一義（ささきかずよし）

今後のまちづくりは
観光と環境、防災の三位一体で

こちらから視聴できます

問 高田松原津波復興祈念公園への来訪者の推移はどうか。

答 昨年4月から10月末までで、前年同期比95・8％となっている。

問 観光や環境、そして防災のバランスがとれた「海と共に生きるまち」を市民と共に考えてはどうか。

答 いずれも本市のまちづくりを進める上で互いに相乗効果を生み出す重要な柱。これを三位一体として推進することが本市の強みを最大限に生かした持続可能なまちづくりにつながると思っている。

問 気仙小学校がある山に、避難先を示す大きな看板の設置は。

答 今後、可能か検討する。

高齢化社会問題は

問 被災者の見守り制度が本年度で終了となるが、来年度以降の高齢者に対する「心の復興」支援はどうか。

答 見守り事業が継続していけるよう、国へ要望している。

問 市民が元気に暮らすための施策についてはどうか。

答 高齢化率41・9％の本市は、「はまってけらいん」運動などを推進して健康寿命の延伸を目指したい。

誰もがわかる避難先看板の設置を